

## ヨーロッパ博物館視察記 II

間 多 善 行

## ウィーン

旅程では、フランクフルト滞在四日間のうち、ハイデルベルクに一日、ライン下りに一日を費して、ジュネーブに飛び、ジュネーブで一泊してすぐウィーンに行き、ウィーンで二泊して一旦ジュネーブへ引き返してからローマへ飛んだので、ジュネーブが拠点のようになったが、実際にはジュネーブでは時間がなくて博物館視察はできなかった。

従って博物館視察記の本稿では、ジュネーブは割愛してフランクフルトからウィーンへ移ることになる。ウィーンは数世紀に亘って中部ヨーロッパを支配したハプスブルグ家の本拠地である。殊にナポレオン戦争の跡始末にはヨーロッパ中の各国代表がウィーンに集まって花やかな外交戦を展開した様子は映画「会議は踊る」でも紹介されたとおりでである。今、ウィーンのホーフブルグ宮殿前付近にはその当時の雰囲気を残した建物が数多く残り、特に我々博物館関係者に有難いことは、ホーフブルグ宮の中庭と環状道路を狭んで反対側にマリア・テレジアの銅像を中心とした二百メートル四方位の庭園があり、その庭園は一方が環状道路に面しており、その反対側はもう一つの道路に面しているが、道路に面しない二辺にちょうど向かい合って国立美術史博物館(Kunsthistorisches Museum)と国立自然史博物館(Naturhistorisches Museum)とが建っていることである。ちょうど上野に国立博物館と国立科学博物館とが道路を狭んで建っているのと似ている。規模は国立博物館は美術史博物館にやや匹敵すると思われるが、日本の方は三段階に小間切れに建て増しされているのに、向こうは始めから庭園と二つの博物館とを一体として設計されているので、その壮麗さは上野の比でない。それに日本の国立博物館が所蔵点数約十万点なのに対して、ここの美術史博物館は四十万点ということであるから、日本は経済的に世界一、二を争っているが、文化的にはいかに後進国であるかを思い知らされる。ヨーロッパの、かつては大国であったとはいえるものの、現在では少くとも世界の政治・経済の舞台からは顧みられることの少ない小国でもこれである。大英博物館、ルーブル美術館、メトロポリタン美術館、エルミタージュ美術館等の所蔵品数百万点と比べたら、博物館世界では日本がいかに小国であるか、冷汗の出る

思いがするのは私だけであろうか。

余談はさておき、まず美術史博物館の方から視察することしよう。

## 3. 国立美術史博物館

ルネサンス式四階建、正面中央に吹抜のドームを有する堂々たる建物である。1891年の建築だというから、日本の明治24年に当る。収蔵品は絵画、彫刻、工芸、エジプト美術、楽器、貨幣、武器、武具に及び、絵画はルネサンス以後のヨーロッパの代表的画家の作は網羅されており、チチアーノ、チントレット、ヴェロネーズ、ラファエロは勿論、ルーベンスの大作が七、八点壁面を埋めているのは圧巻であった。また地域の特徴としてドイツ、フランドルの著名画家デューラー、ブリューゲル、クラナッハ等が揃っているのも見逃すことはできない。彫刻その他の美術品にしても一流の品が揃っている。今度のヨーロッパ旅行をして、私は旅行のガイドブックに、ホテルに評点を付ける方法として星の数で表わすことが行われていることを知った。五階級に分れていて、超一流は星五つ、一流が星四つ、二流が星三つ、以下星二つ、一つとなるが、それに因んで博物館にもガイドブックにそのような標示があれば利用者には非常に有力な参考になると思った。今、その方法でこのウィーン国立美術史博物館に評点を付けるとしたら、大英博物館、ルーブル美術館、メトロポリタン美術館等を星五つの超一流博物館とすると、ウィーン国立美術史博物館は星四つ、上野の国立博物館も辛うじて星四つに達する程度、フランクフルトの市立美術館は星三つ、ゲーテハウスは博物館を含めて星二つ、ハイデルベルクの武器・武具陳列館は星一つということになる。これで一応の標準ができたので以後の視察博物館にこの方法を以って評価して行くことにしようと思う。

さて美術史博物館の正面玄関から入った吹抜のホールから式階へ上る階段は正面に大階段があり、踊場から両側へ二つに分れた上部階段が手前に向かって上っている。その設計が上野の国立博物館に似ている。あるいは上野の本館を改築するとき、ここのを真似たのかもしれない。違うところは、ここは踊り場にローマ彫刻の中四、五メートルはあろうかというのを据えてあ

るが、上野には何もないことである。それからこの博物館で印象に残っているのは二階の奥の回廊のような部屋に、巾十メートルはあろうと思われるタペストリーが天井から壁一杯にいくつも吊されていたことである。とかくするうちに昼になったので、一階の隅に確か食堂があったので、そこで食べることにしてサンドウィッチとサラダと飲物をセルフサービスで買って、備え付けのテーブルで食べたが、それから後の各国の博物館の食堂でとった昼食に比べて最高であった。

昼食休憩後、マリア・テレジアの銅像のある中庭、というよりも小公園を散策しながら向い側の自然史博物館へ行く。

#### 4. 国立自然史博物館

美術史博物館と向い合って対をなす全く同じ外観の建物である。完成は美術館より2年早く1889年だそうである。もっとも、それは現在の建物が完成した年で、博物館そのものの創立はそれより遥かに古く、1748年というから、日本の江戸中期で、寛延元年にあたり、大岡越前守が寺社奉行に任ぜられた年である。日本で始めて博物館的なものに興味を示した平賀源内が生れたのが、それより52年後の1800年であるから、改めて日本の博物館界の後進性を思い知らされる。もっとも、これは歴史的事実を回顧しているだけで、私は別に後進性にコンプレックスを感じて恐縮しているわけではない。

それはさておき、この自然史博物館と上野の科学博物館との大きな違いは、ここは文字どおり自然史で、日本である時期博物学と称された鉱物学、植物学、動物学の三つを合せた範囲に限られているのに対し、上野の科学博物館はそれ以外に、理化学、工学から産業までも含めた総合科学になっていることである。従って大体同じくらいの空間に、日本の方は科学全般が展示されているのに対し、ここは博物部門だけで全体を占めているから、展示品の精緻さは数等勝っているようである。

さて、現場を拝見するとしよう。玄関を入ってすぐ気が付くことは、ホールから階段にかけての装飾が、美術館と全く異なることである。美術館の方は内装がさながら宮殿のように柱の飾り彫刻から、階段の手摺り、天井画まで寸分の隙間もなく飾り立てられているのに対し、この自然史館の方は、装飾が全くなくはないが極めて簡素である。外観が全く同じである、と書いたのは、内部は全く違うという含みを持っていたからである。まあ、中に展示するものの違いをそのまま

反映させたのであろう。余談はさておき、玄関ホールにはイグアノドン(確かにそうだと思ったが、違っているかもしれない)の骨格のレプリカが展示してあった。日本の科学博物館でも入口の近くに恐竜の骨格模形を展示してあった記憶があるので、今度調べて見たら、日本のはタルボザウルスという種類で、ゴビ砂漠から出土した物のレプリカということであった。どちらも恐竜としては小形で肉食であるところは似ているが、後者の方は前肢が極端に小さいように思う。

全館を一巡して感じることは展示資料の数が夥しいことである。ことに軟体動物のアルコール漬の標本の多いことは、正直いって我々専門外の者にはうんざりする程並んでいる。それだけに、その部門の研究者にとってはまさに天与の宝庫といってもいいだろう。それから、オーストリアは地形的にアルプスの氷河が東へ向って切り拓いて行ったドナウ河の狭谷にあたる関係で、氷河期の古生物の化石が多数出土し、十九世紀以来古生物学の先進国だったらしく、古生物部門の展示資料の豊富さも眼を驚らせるものがある。次に変わったことで記憶に残っているのは、鳥類の展示室で、ここは部屋の一侧がずっと硝子窓になっていて、人工光線は殆んど使ってなく、自然光線で展示してあるが、そのガラス窓の一部に、窓のガラスそのものに鳥の飛んでいる姿を弗化水素で腐蝕した絵装で表わしてあるのが眼を索いた。普通、鳥の展示は剥製を止まり木に止まらせてあるので、その飛んでいる姿は想像が付かない。せいぜい絵に描いて壁に貼るくらいであるが、それでは迫力がない。それに比べて、この窓ガラスの腐蝕絵は、われわれが窓を視上げた瞬間青空を背景に鳥の飛んでいる姿が眼に飛び込んで来るのであるから、実にダイナミックに、生き生きと感じられる。これは大したアイデアだと思うのだが、どうしたわけか、ここでもこの室の一部に十羽ぐらい描かれているだけで、後はなく、外の博物館では勿論見たことはない。もっとも、これから後行ったところは美術館が忙しくて、自然史博物館は視る暇はなかったが。

さて、そろそろ日も傾きかかったので、ここを出て夏の夕方の花の都ウィーンの街をそぞろ歩きながらホテルに帰ることにした。ウィーンは花の都であると同時に、音楽の都としても有名である。従って、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトを始め、ワルツ王ヨハン・シュトラウス等有名作曲家の銅像が、あちこちに散在する小公園に立っていて、まこと音楽の都だなと感じさせる。その音楽の実質的な中心である国立オペラ劇場は

シーズン・オフで大修理中で、中を見ることはできなかった。それにしても、私の泊ったインターコンチネンタル・ホテルのすぐ前が公園になっており、その公園の中に「ワルツ・ハウス」というレストランがあり、毎晩夕方から楽団が演奏している。室の内外に丸テーブルを囲んでビールの杯を重ねた客が、野外のテーブルに囲まれた広場でダンスを楽しんでいる図は日本では見られない光景である。

ウィーンで二泊目を過ぎて、三日目はまたジュネーブへ帰る日である。その朝ホテルから空港へは、同行の毎日新聞の友人が知り合いのウィーン在住の知人から差廻してくれた車で行ったが、途中時間に少し余裕があるからと、空港近くの国営墓地にモーツアルトその他の大音楽家八人の墓を案内してくれたのは有難かった。紙数も超過したので次号でローマを訪れることにして本号はこれで終ることにする。